



Title	日本近代における『三国志演義』の改作と研究について
Author(s)	陳, 卓然
Citation	(2018-03-20)
Issue Date	2018-03-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/38037">http://hdl.handle.net/10069/38037</a>
Right	

This document is downloaded at: 2019-09-19T06:47:36Z

## 日本近代における『三国志演義』の改作と研究について

長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科  
陳卓然

本論において、日本近代における『三国志演義』の改作及び研究を巡って、主に『三国志演義』の人物像に主眼を置き、研究を進めてきた。前半において、吉川英治、北方謙三、陳舜臣の『三国志演義』に関する改作を個別に取り上げ、「三絶」を巡る各々の人物像及び人物形成における特殊な手法を検討してきた。また後半においては、渡辺義浩、金文京、井波律子、各々の『三国志演義』の主要人物に関する論考の特色、研究方法、特殊な観点などを忠実に見出し、日本近代の『三国志演義』の主要人物に関する研究の在り方の実像を明らかにしてきた。

各章の概要は以下の通りである。

序章は、本研究の研究動機、研究範囲、研究しようとする内容と研究目的について概観している。

第一章「吉川英治の『三国志』」では、「国民文学作家」と称される吉川英治の『三国志』を精読し、その中で見える曹操、関羽、諸葛亮の人物像と中国で権威とされている毛宗崗本『三国志演義』のその差異を考察した。これにより、吉川英治『三国志』は、曹操と諸葛亮という二人を物語の中心に置き、はっきりした評価の目をもって、曹操をこの時代第一の人物として描いたことが判明した。そして、吉川英治は「三絶」の人物像を作り上げるとき、用いられた独特な叙述方法を検討することにより、吉川英治の『三国志』は「国民文学」たる作品の三つの要素を備わっているという結果を得た。広く読まれるのは言うまでもなく、相当な創意や独自の解釈をかきいれることも認めざるを得ない。そして、最も重要なのは吉川英治『三国志』に一国の国民性・民族性がよく表れ、その国特有の文学であると言える。

第二章「北方謙三の『三国志』」では、まず北方謙三『三国志』の創作動機について概観した後、「三絶」に関する人物像を纏め、それを毛宗崗本『三国志演義』と吉川英治『三国志』との比較を行い、三つの作品の異同を明らかにした。それにより、北方謙三『三国志』は、曹操を群雄居並ぶ三国時代の中で最も英雄らしい英雄と見なすことを確認した。そして、同作品は基本的な展開・人物描写は正史に準拠しながらも、適宜に独特のストーリー解釈を施す、人物の心理描写に重きを置いた骨太な描写という特色も見出した。

第三章「陳舜臣の『秘本三国志』」では、陳舜臣の『秘本三国志』を精読し、また整理することで、『三国志演義』のように「三絶」視点ではなく、主に五斗米道の教母少容から見た物語になっていることが判明した。「三国志」を武将・英雄以外の、第三者的な視点から描いた異色作であると言えよう。そして、推理小説作家の視点で、物語の筋の再構築を行

いながら、登場人物の行動の裏に隠された動機及び心理的なかけひきを追求する、という陳舜臣『秘本三国志』の特別な叙述方法を確認した。

第四章「日本近代における『三国志演義』の研究」では、諸賢の論説を整理することによって、中国で殆ど奸雄として扱われた曹操は、日本にて英雄のイメージが強烈であったことを判明した。そして、日本における、関羽ブームの始めや流行を解析することによって、殆どの日本人にとっては、関羽という歴史的人物は信仰の対象とはなりえず、単なる異国趣味の域を出なかったという結果を得た。さらに、諸葛亮の真実、虚実をいろいろな史料とともに追求することにより、神のようなイメージは、史実とフィクションを混ぜ合わせ、出来上がったことを明らかにした。

以上、『三国志演義』に関する改作と研究の特色を分析することにより、近代日本における、曹操、関羽と諸葛亮の位置付けを再確認することができた。そして、終章においては、各章において考察してきた内容を踏まえて、近代日本における『三国志演義』の改作と研究の特色を究明し、そこに映し出される日本的な発想及び人々の独特な思考形態を見出した。

日本の改作及び研究は歴史の真実に重点を置き、曹操の悪役ぶりを描きながら、実は彼こそが時代を牽引した「真の改革者」である、という、曹操本来の姿を随所に描いている。諸葛亮と関羽に対しても、行き過ぎた虚構は抑制されたことにより、人物の人間性を取り戻し、欠点もある平凡人に転換されることができた。このように、日本の改作は、中国の伝統的な思想の束縛から抜け出す、科学精神に満ちた新しい「三国志」と言わざるを得ない。そして主要人物に関する研究に対して、やはり正史『三国志』と小説『三国志演義』は分けて捉えるべきであり、歴史的真相を追究するといった観点から見た場合に、現代的な再評価の姿勢は評価され得る。